

Samedi 19 mars

14h20-15h20

Situation actuelle de l'enseignement du français au Japon et Mise en commun d'Observations de classe

日本のフランス語教育の現状と授業見学総括

土屋良二（津田塾大学）、中村公子（獨協大学）

現在、日本における外国語教育をとりまく環境は非常に厳しい状況にあります。そもそも、誰が、どこで、どのようにフランス語を教えているのでしょうか。まず、日本のフランス語教育の今の姿について、いくつかの資料を元に、様々な場所で教えていらっしゃる皆さんご自身の位置づけについて考えてみましょう。

そして、ご自身の位置づけが見えてきたら、このスタージュ開始前に行った授業見学の時の「grille d'observation」を元に、少人数のグループで見学した授業が「どのような授業だったのか」を話し合いながらまとめてみましょう。他の人たちと意見交換をする中で、きっと皆さんが日頃行っている授業との共通点や相違点がよりはっきりと見えてくることでしょう。

この séance のまとめとして、ご自身の置かれている環境の中で、授業見学を通しておぼろげながら見えてきていると思われる、皆さんが今後、実践してみたいと思う授業とはどのような授業なのか、そして、それを実現するために必要なことは何なのかについて考えてみましょう。皆さんがこのスタージュで「学びたいこと」や「得たいもの」をよりはっきりと意識していただけたら幸いです。

<受講者へのお願い>

★ 授業見学が終わる3月上旬に、皆さんお一人ずつに、メールで「授業見学を終えて」というシートを送らせていただきます。授業見学を振り返りながら、ご自身の感想や考えなどをまとめてください。そのシートは3月中旬頃までに返信していただく予定です。

★ 授業見学の際にメモされた「grille d'observation」を、忘れずに、スタージュ初日にお持ちください。

Élaborer un cours

Pierre-Yves Roux (Centre international d'études pédagogiques)

Quelles que soient la qualité et la pertinence des méthodes utilisées durant le cours de français langue étrangère, l'enseignant peut être amené à élaborer ses propres fiches pour pallier d'éventuelles insuffisances ou mieux contextualiser l'approche notamment socioculturelle. Quels activités sélectionner dans le manuel, selon quels critères, avec quels objectifs, en respectant quelle progression interne, et quel traitement envisager, feront partie des questions auxquelles cette intervention se propose d'apporter des réponses, sous forme de travaux pratiques et concrets devant permettre de dégager des principes directeurs.

Pratique de classe : orientation**模擬授業：オリエンテーション**

常盤僚子（東京日仏学院）、中村公子（獨協大学）

チューター：

原田早苗（上智大学）、室井幾世子（上智大学）

中野茂（早稲田大学高等学院）、土屋良二（津田塾大学）

善本孝（白百合女子大学）

ここでは、スタージュ最終日にstagiairesの皆さんに行っていただく「模擬授業」の準備の進め方についてご説明いたします。皆さんには少人数のグループに分かれて、いくつかの教室活動を考えていただく予定です。各グループにチューターが一人つきます。また具体的に模擬授業をしていただく上で、「どのような題材を使って」「何について」の授業を準備するのか、また模擬授業実践における注意点などについても各グループのチューターからより詳しくお話いたします。

Pratique de classe : préparation 1

模擬授業：準備 1

鵜澤恵子（東京日仏学院）

授業でactivités を行うとき、教師にとって一番問題となるのは学習者の間にコミュニケーションが成り立つかどうかということです。コミュニケーションを成立させるためには、どのような教室活動を設定し、それをどのように学習者に提示すればいいでしょうか。

このアトリエでは、具体的に教室の場面をイメージしながら、activitésを行うときの指示の出しかた、教室空間の使い方、グループの作り方、教師の参加のしかたなどを考えます。

Documents authentiques oraux et écrits pour la classe de français

Isabelle Morieux (Fondation Alliance française), Michel Boiron (CAVILAM)

Notre objectif est de donner le goût du français et d'associer intimement l'acquisition systématique des connaissances linguistiques à la compréhension des contextes culturels.

Sous le terme « documents authentiques » se cache toute une série de documents oraux, écrits et/ou visuels qui, au départ, n'étaient pas destinés à une utilisation dans une salle de classe : chansons, bandes dessinées, courts métrages, émissions de télévision ou de radio, articles de presse, publicités et même, textes littéraires....

Notre objectif est d'encourager l'utilisation de tels documents dès les premiers niveaux car ils permettent un contact vrai avec la langue cible et contribuent à donner du sens à l'apprentissage.

A partir d'exercices créatifs et récréatifs directement applicables en classe, de réflexions sur des stratégies d'enseignement et d'apprentissage à la fois sérieuses et conviviales, nous explorerons différentes approches de ces documents.

L'atelier alternera exposés, travaux de groupes, simulations de classe et discussions critiques.

Présentation du CECR**ヨーロッパ言語共通参照枠（CECR）について**

西川葉澄（上智大学）、中野 茂（早稲田大学高等学院）

ヨーロッパ統合の一連の流れにおいて、欧州評議会の言語政策の柱として2001年に打ち出されたヨーロッパ言語共通参照枠（le Cadre Européen Commun de Référence pour les langues, 略CECR、英語表記はCEFR）は、現在のフランス語学習において重要な指標となっています。このセッションでは、30分という限られた時間ではありますが、ヨーロッパ共通参照枠についてフランス語教師として押さえておきたい必要最低限の点に絞ってご紹介したいと思います。

共通参照枠の成り立ちと意義ならびに、A1からC2までのレベル概要を主に扱いますが、CECRに代表されるヨーロッパの言語政策が日本のフランス語教育に及ぼす影響についても簡単に触れたいと思います。

Méthodologie du FLE

Pierre-Yves Roux (Centre international d'études pédagogiques)

Connaître le passé pour mieux se situer dans le présent, tel pourrait être l'objectif de cette intervention qui proposera un historique des principaux courants méthodologiques de l'enseignement du français langue étrangère au cours du XX^e siècle. Une découverte active des différentes méthodologies permettra d'identifier les ruptures mais aussi les continuités d'un courant à l'autre, tout en insistant sur le fait que si les méthodes du passé peuvent aujourd'hui faire sourire, elles se sont révélées efficaces en leur temps, et les approches actuelles feront certainement sourire à leur tour dans quelques décennies...

Utilisation des TICE**TICEの利用法**

國枝孝弘（慶應義塾大学）、古石篤子（慶應義塾大学）

テクノロジーとは何でしょうか？このアトリエでは、教室空間を越えて「人と人をつなぎあわせるメディア」と捉えたいと思います。テクノロジー「で」学ぶのではなく、テクノロジーを「通して」学ぶことを考えます。

昨今のe-learningの進展には目覚ましいものがあります。かつてはコンピュータのスキルをもった教員が自ら教材を作成して（プログラミングして）授業を行っていました。しかし、現在では「どのような教材を作成するか」から「教材をどのように用いるか」という問いにシフトしてきています。

そもそも、なぜ既存の教科書やCDではなく、TICE (Technologie de l'Information et de la Communication pour l'Enseignement)に着目するのか。それは時代の最先端だからではありません。TICEを用いることで、学習の環境が教室という閉じられた空間から、その外へと一気に広がるからです。またそのことによって、学習者は、教室の外で、他の学習者と出会う機会を得ることができるからです。

このアトリエでは、WEB教材、podcast、遠隔TV会議、LMS(learning management system)などをもちいた実践的な授業例を紹介しながら、ITを用いた学習のあり方にアプローチしていきます。

そして、教育の目的をどこに定め、学習者のどんな力を育てるために、どのようなカリキュラムを設計して、その中でどのようなテクノロジーを使うのか — 教育、学習者、そして学習環境をトータルに考えながら、TICEにしかできないことの見極めをみなさんしたいと思います。

Pratique de classe : préparation 2**模擬授業：準備2**

チューター：

原田早苗（上智大学）、室井幾世子（上智大学）

中野茂（早稲田大学高等学院）、土屋良二（津田塾大学）
善本孝（白百合女子大学）

それぞれのグループ担当のチューターとともに、最終日の「模擬授業」のための準備を行います。また、チューター以外でも準備に協力してくださる講師もいますので、お気軽に声をかけてご相談ください。

Lundi 21 mars

9h30 – 11h30

Comment enseigner la prononciation ?

Bertrand LAURET (Institut de Linguistique et Phonétique Générales et Appliquées
– Sorbonne Nouvelle Paris III)

La prononciation est une composante de la langue qui doit faire appel à une approche spécifique tant en enseignement qu'en apprentissage. La prononciation d'une langue étrangère nécessite en effet une « perméabilité de l'ego » impliquant l'acceptation de / voire l'adhésion à une nouvelle esthétique vocale pour permettre à chaque apprenant de vouloir s'approprier la musique (niveau suprasegmental) et les sons (niveau segmental) de la nouvelle langue. La recherche a montré qu'il s'agit là d'une part essentielle de l'apprentissage, bien avant les explications acoustiques et articulatoires et les exercices d'entraînement.

L'atelier abordera donc les aspects suivants :

- initiation et entretien de la motivation des apprenants à l'acquisition d'un nouveau système phonétique
- comparaison entre les caractéristiques phonétiques du français et du japonais au niveau suprasegmental (rythme, intonation, accentuation...) et au niveau segmental (voyelles et consonnes) : principales difficultés rencontrées par les apprenants japonais
- mise en place de l'entraînement des apprenants, en classe et hors la classe

Bibliographie

ABRY, D., VELDEMAN-ABRY, J. (2007), La phonétique : audition, prononciation, correction, Paris : CLE International.

LAURET, B. (2007), Enseigner la prononciation du français : questions et outils, Paris : Hachette.

Analyse de manuels**教科書をどのように使うか**

飯田良子（東京日仏学院）

ふつう、授業では教科書を使います。皆さんはどのような基準で教科書を選んでいきますか。自分が選んだ、あるいは指定された教科書が使いにくい、授業目的に合っていない、と感じたことはありませんか。

教科書を使いこなせるようになることは良い授業のために大切なことです。

このアトリエでは教科書の会話や練習問題等を取り上げ、「使いこなす」をキーワードに、授業目的に合う活用の仕方を考えてみたいと思います。

また、自分で教科書を選んだり、指定された教科書を理解するためには「教科書分析」をしなければなりません、そのことについても触れる予定です。

Pratique de classe : préparation 3**模擬授業：準備3**

チューター：

原田早苗（上智大学）、室井幾世子（上智大学）

中野茂（早稲田大学高等学院）、土屋良二（津田塾大学）

善本孝（白百合女子大学）

それぞれのグループ担当のチューターとともに、最終日の「模擬授業」のための準備を行います。また、チューター以外でも準備に協力してくださる講師もいますので、お気軽に声をかけてご相談ください。

Atelier ouvert au public**La poésie en classe de FLE**

Pierre-Yves Roux (Centre international d'études pédagogiques)

La poésie fait partie d'un genre littéraire trop peu souvent exploité en classe de FLE. L'atelier analysera les raisons de cette désaffection et inventoriera les « bonnes » raisons d'introduire des textes poétiques dans sa classe dès les premiers niveaux d'apprentissage. Des pistes pour l'exploitation pédagogique de textes de Rimbaud, La Fontaine ou encore Alfred de Musset seront dégagées à partir de travaux pratiques dirigés et réalisés en groupes.

Comment enseigner la grammaire ?**文法をどう教えるか？**

山根祐佳（慶應義塾大学）

入門レベルや初級のクラスを教えていると、「フランス語」ではなく、「フランス語文法」を教えているように思えることがあります。教室で初級レベルまでを教える場合、文法の比重が比較的高くなることは否めません。そして、これは、フランス語は習いたいけど文法は習いたくない（！）学習者にとって、授業が眠く退屈なつらい時間になってしまうことの一因となります。

しかし、当然のことですが、文法を無視してフランス語を身につけることはできません。文法の必要性（または有用性と言ってもいいでしょう）を多少なりとも自覚すれば、学習者は興味を持ち文法に取り組むことができるはずです。このアトリエでは、学習者がその必要性や有用性を感じながら、文法を学ぶことのできる授業を、みなさんといっしょに考えてみたいと思います。

Comment enseigner la littérature ?**文学をどのように教えるか？**

湯沢英彦（明治学院大学）

「文学をどのように教えるか」という問いは、「文学をなぜ教えるのか」という問いと表裏一体のものでしょう。そこでこの授業ではまず、昨今のフランスにおける文学の存在理由をめぐる議論のいくつかを紹介し、なかでも「モラル」や「人生の意味」を強く押し出す論調に注目したいと思います。それを踏まえつつ、フランス語の初歩を履修した大学2年生のクラスを想定し、具体的なテキストを使いながら、授業展開の工夫をいくつか提示する予定です。たいへん困難な課題ですが、外国語で書かれた文学作品を読むという、これ以上ない「他者理解」の現場の演出をみなさんと一緒に考えたいと思います。

Pratique de classe : Présentation / Pratique de classe : Mise en commun**模擬授業 / 模擬授業の総括**

常盤僚子（東京日仏学院）、中村公子（獨協大学）

与えられた教材を用い、stagiairesの皆さんが組み立てた教案に従って模擬授業を行っていただきます。一人あたり10分程度で、自分以外のstagiairesを学習者に見立てて授業をしてください。発表の順番は当日発表します。

自分以外のstagiaireが授業を行う際には、観察者として気づいたことをメモしてください。それをもとにあとで意見交換を行います。

当日は、授業見学にご協力いただいた東京日仏学院の飯田良子さんと鶴澤恵子さんにコメンテーターとして参加していただくほか、都合のつく講師や準備委員会メンバーも見学する予定になっています。

<担当者より一言>

教職経験の豊富な方も、そうでない方も、たとえ短い時間でも授業を見られるのはとても緊張するものです。でも、ここは皆さんのパフォーマンスを評価・査定する場ではありません。あくまでご自身が普段の授業を振り返り、新しい発見をし、それぞれの個性や職

場環境に合った授業スタイルを練り上げていただくための一つのプロセスですので、怖がらずに新しいことに挑戦してみてください。この模擬授業が皆さんの「自分の授業スタイル」を見つける一助となれば、私たちもとてもうれしく思います。